

2016年9月24～25日

日本・イラク学術合同ワークショップに参加して

(文責：山尾大[九州大学、計画研究 B02])

このワークショップは、ポスト IS 時代のイラクの行方を多様な視点から論じることを目的にしたものであった。同時に、2005 年よりマフムード・カイスィー教授（バグダード大学）を中心とするイラク諸大学の研究者とともに続けてきた学術交流の一環でもあった。2007 年 2 月に東京で開催されたワークショップに始まり、同年 6 月にはヨルダンのアンマン、2009 年には再び東京、そして 2010 年にイラクのエルビル、さらに 2012 年に東京、2013 年はエジプトのカイロ、2014 年 8 月にトルコのアンカラ、2014 年 12 月に京都、そして昨年 2015 年にはイラクのバスラと、11 年間交流事業を続けてきた。合同ワークショップは今回で 6 回目、学術交流自体は 10 回目となる。

イラクという国の地政学的な重要性や現在の混乱した状況に鑑みると、こうした学術交流を地道に続けることは極めて重要であることは多言を要しない。我が国でもイラクに対する関心は高い。それを反映して、多数の参加者があり、活発な議論が繰り広げられた。以下、ごく簡単に内容を振り返りたい。

千葉大学で開催された初日には、冒頭で酒井啓子教授（千葉大学）が、ムスタンスィリーヤ大学の今年度の研究奨励賞に選出され、授賞式が行われた。その後の基調講演では、日本との学術交流を全面的にバックアップしているファッラーフ・アサディー教授（ムスタンスィリーヤ大学学長）が、イラクの歴史教育の変遷について論じた。同教授はイラク戦争後の歴史教科書編纂のコアメンバーでもあり、現場の生の声を聴くことができた。とりわけ強調されたのは、旧バアス党政権時代に作られた教育内容が、イラク戦争を経ていかに変容したのかという点であった。

セッション 1 のテーマは「IS 後のイラクと地域政治」であった。吉岡明子主任研究員（日本エネルギー経済研究所）は、クルディスタン地域政府がイラク中央政府から事実上独立した政治運営を進めている点を、ハイブリッド・ガバメントという概念を用いて分析した。保いう国・質疑を含め、クルディスタン地域政府と中央政府の対立関係の複雑性が浮き彫りにされた。続く山尾大准教授（九州大学）は、アバーディー政権の改革政策が街頭政治の激化を惹起したプロセスを、とくにサドル派の動きに着目して明らかにした。これに対し、街頭政治の活動の多様性、共産党などの勢力を分析の俎上に挙げる必要性などの指摘があった。

サラーフ・ハサン教授（バグダード大学）は、イラクで発生したジェノサイドを、文化的なジェノサイドと、それに対する知識人の使命という観点から分析し、スンナ派やシーア派のみならず、その他の少数派へのジェノサイドについて多角的に分析した。イフサーン・アミーン教授（バイトゥルヒクマ館長）は、イラクとその周辺国で台頭した宗教を前面にした過激主義のルーツがどこにあるのかを、歴史的な政治思想などを紐解くことで明

らかにした。

次は、イラクをはじめとする中東地域で大きな問題になっている宗派対立についての 2 本の、かなり異なる視点からの報告である。酒井啓子教授は、イラク戦争後に宗派対立が激化した原因について、もともと宗派は対立要因でなかったにもかかわらず、多様な利害関係の対立が生じるなかでメディアが宗派を扇動したことによって、対立要因そのものになっていったという論を展開した。反対に、フサイン・バハーディリー教授（イラーキヤ大学）は、宗教文献を紐解いて、スンナ派やシーア派をはじめとする様々な宗派がイスラーム初期からどのように語られてきたのかを明らかにした。これは、根本的な宗派主義の要因が歴史書物に見出せることを強調した議論であった。

「中東の歴史、文化と社会変容」と題されたセッション 2 は、翌日、東京大学東洋文化研究所で行われた。三谷博教授（跡見女子大学）は、基調講演で、明治維新について **Rejuvenation** という概念を用いて包括的に解説した。日本の近代化に高い関心を持つイラクからの派遣団は、三谷教授のライフワークをまとめたこの講演を熱心に聞き入り、活発な質問を投げかけていた。次の報告者のマフムード・カイスィー教授は、日本とイラクの学術協力がこれまでどのように進んできたのかを、具体的な事例と同教授の今後の構想を交えながら説明した。日本の新幹線をイラクに導入すれば、移動時間の短縮が住民の関係を密にし、それがイラクの国民統合を促進することに繋がるとの指摘は印象的だった。

桜井啓子教授（早稲田大学）は、イラン政府が、世界各地から留学生を受け入れる政策を進めるなかで、各地域のシーア派教育をイラン化／ペルシア化している点を明らかにした。他方、アラー・アーミリー（キヤム小学校理事長）は、彼がイラクに創設した日本型の教育システムを取り入れた私立小学校の取り組みについて、実際の映像を交えて紹介した。とくに担任制の役割を重視している点が強調された。最後に、長沢栄治教授（東京大学）が、日本の安保関連法案の形成と日本の平和主義の変容について、文学や詩なども使いながら説明した。

総合討論では、今後の日本とイラクの学術的な関係をさらに強化していくことの重要性が確認されたことは言うまでもない。それとともに、日本の事例を取り込む場合には、それが有する構造的な問題点も精査する必要があるとの指摘がなされた。イラク混迷の度合いが増すほど、こうした地道な学術交流を続けていくことの意味が大きくなる。今後もこの努力を続けていくとともに、両国の様々な分野での結びつきという成果に結実することを切に祈っている。